

影山三郎とアジア

——東京帝国大学在学時と立教大学在職時をつなぐもの——

阪 本 博 志

一 影山三郎について

二〇二一年一〇月に、『朝日新聞』の女性専用投稿欄「ひととき」が開設七〇周年を迎えた。

「ひととき」欄を発案した影山三郎（一九一〇―一九九二）の略歴について、影山の訃報を伝える一九九二年七月二日の『朝日新聞』朝刊には、次のように書かれている。

「ひととき」生みの親

影山 三郎氏（かげやま・さぶろう＝曙光「引用者注・しよこう」新聞編集長、元朝日新聞東京本社学芸部長）10日午前0時13分、胸部大動脈瘤（りゅう）破

裂のため、東京都新宿区の病院で死去、80歳。故人の遺志で、葬儀・告別式は行わない。自宅は新宿区下落合2の25の3。妻は文（ふみ）さん。

37年に朝日新聞社に入社。太平洋戦争時、特派員として従軍、捕虜となり、フィリピン・レイテ島の収容所で壁新聞「曙光新聞」を編集。五万人の捕虜に、日本国内や世界の情報を提供した。朝日新聞学芸部次長のころ、家庭面に読者からの投稿コラム「ひととき」を企画、52年から掲載を始めた。

立教大学教授なども務めた。75年に曙光新聞を季刊で復刊、無名兵士の記録や日比友好の記事などを中心に編集を続けた！。

上記記事を踏まえて拙稿「解題『朝日新聞家庭面「ひととき」欄の三十年——戦後マスコミ読者論』」においても整理したように、メディア史の文脈において影山は、次の三点において足跡を残している。

それは第一に、「ひととき」の発案者である点である。記事では、「投稿コラム「ひととき」」の始まりが一九五二年となっている。もともと「ひととき」そのものが生まれたのは一九五一年一〇月である。当初は女性文化人による随想が掲載されていた。一九五二年一月より読者からの投稿も掲載するようになり、四月下旬より読者の投稿のみが掲載された。

第二に、『曙光新聞』編集長であった点である²。

第三に、立教大学で教鞭をとった点である。後述するように影山は、一九六八年度後期に非常勤講師として新聞原論を講義したのをはじまりに、活字メディア論などを講じ、一九七六年度に教授を務めた³。

第一の「ひととき」について、朝日新聞社での影山の経歴を簡単に見ておくと、一九三七年四月に東京本社に入社し、社会部に配属された。一九四〇年一〇月中央調査会幹事補佐となっている。戦争をはさみ、一九四六年十一月に

帰社した。一九五〇年一二月学芸部次長に、一九五八年一月学芸部長に就任している。一九六五年五月『朝日ジャーナル』編集長を経て、一九六六年一〇月定年退職した。引き続き一九七二年一〇月まで出版局嘱託勤務をしている⁴。このなかで「ひととき」発案にいたった経緯は、次のようなものである。

一九四〇年、緒方竹虎を会長とする上記の中央調査会が朝日新聞社内を設置されるとともに、影山はその幹事補佐となる。そして「独・伊・ソ連の新聞政策」の調査をおこなった。このレポートに影山は次のようなことを書いた。

「ソビエトの新聞は、投書による記事収集の組織をもつ。読者の現地報告を整理編集する。労働者、農民たちが仕事の余暇をみて、各自の職場から通信を送る。つまり「ちまたのこえ」にきくのである」

「各新聞社には投書係があつて、取捨選択するが、三回採用された投書家は特殊通信員として新聞社の台帳に載せられ、原稿料も支払われる」

「農民新聞のような特殊な新聞など、ほとんど、これら農業通信員の投書で国内記事をうめるといわれ、通信員あるいは毎日の投書を調べる投書係が、編集局の

主力となっている」

「特殊通信員運動は、大衆の意思を表示し、さらにこれを組織し、指導するという重要な使命を帯びている。ソビエト社会の欠陥をつこうとする大衆の意見がもっている力は認められなければならない」

太平洋戦争中フィリピン・レイテ島特派員として従軍した影山は、同島の捕虜収容所に収容された。ここで影山は、手書きの『曙光新聞』を、二人の同人で五万人の収容者に向けて作った。その約一年間を影山は、「文字どおり」読者とともに「の生活であり、読者といっしょにつくる」新聞であった」と振り返っている。

復社後影山は、『婦人朝日』の社内モニターを務めた。同誌の読者投稿欄から、「書ける女性たち」が全国各地に潜在していることが影山の印象に残った。

そして家庭欄デスクを命じられ、第一号の企画を考える過程で、上記レポートを思い出し、先の一節を頭のなかで次のように置きかえる。「封建的社会の欠陥をつこうとする女性大衆の意見がもっている力は認められなければならない」。このようにして、「ひととき」の誕生につながっていった⁵。

なお影山の主著として知られる著作は、『新聞投書

論——民衆言論の一〇〇年』（現代ジャーナリズム出版会、一九六八年）ならびに増補版の『読者の言論——歴史と展望《増補版・新聞投書論》』（同、一九七六年）である。両者の「あとがき」にあるように、「今日いまの投書の問題を、新聞誕生以来一〇〇年にもおよぶ日本の民衆の言論と行動による意思表示の歴史と結びつけて考えることにした」⁶。書物である。

朝日新聞社内における経歴からも、両者が刊行されたのは、定年退職後であることが確認できる。すなわち、上記第三に挙げた立教大学在職時である。

本稿は、この立教大学在職時の影山の活動の一端を論じるものである。結論を先に述べると、朝日新聞社入社以前の時期すなわち東京帝国大学文学部在学時の中国人留学生とのかかわりと、立教大学在職時の活動に連続性を見出すことができる。ここから、これまでは論じられてこなかった、「影山三郎とアジア」という構図を浮びあがらせたいと考えている。先の拙稿でも述べたように、影山を学術的なテーマとした著作は管見の限り見られない⁷。したがって本稿は、学術雑誌に発表された、初めての影山論となろう。

二 立教大学在職時の影山三郎（一）——その概要

影山は一九六八年一〇月二三日付で、立教大学の「非常勤講師（社会学部・社会学研究科）」を委嘱されている。任期は、一九六九年三月三十一日までである。影山は、後述する「マスコミ教授法試論」において、立教大学で後期から急に新聞原論を担当することになった旨を述べている。

これ以降の影山の担当科目と担当時の肩書について、立教大学社会学部の井川充雄氏に、過去の『履修要項』をお調べいただいた。表は、井川氏が作成してくださったものに一部分加筆したものである。表によると、影山は一九六八年度後期から一九八一年度まで立教大学に在職している。学部の講義科目を一九六八年度から一九八一年度まで、大学院科目を一九七二年度から一九八一年度まで担当している（一九七五年度は大学院の『履修要項』が所蔵されていない）。一九七六年度は教授を務めている。立教大学の定年は六五歳であり影山は教授就任時に六四歳であったことから、教授であったのは一年間である¹⁰。

影山は教授であった一九七六年に演習で「新聞に関する読者の意見調査」を全国規模でおこなった。これは、一九

表：『履修要項』にみる影山三郎担当科目一覧（井川充雄氏作成のものに一部分加筆）

年度	肩書	学部講義科目	演習科目	演習科目	大学院科目
1968		記載なし（新聞原論）			
1969	非常勤講師	マス・コミ特講（2）			
1970	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			
1971	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			
1972	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			応用社会学特殊講義（マスコミ批判方法論）
1973	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			応用社会学特殊講義（マスコミ批判方法論）
1974	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			応用社会学特殊講義（マスコミ批判方法論）
1975	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			（履修要項の所蔵なし）
1976	教授	メディア論（1）活字メディア	基礎演習	演習（1）、演習（2）、卒業論文指導演習	マス・メディア批判方法論演習
1977	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア		演習（1）、卒業論文指導演習	マス・メディア批判方法論演習
1978	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			新聞学特殊演習（3）
1979	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			新聞学特殊演習（3）
1980	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			新聞学特殊演習（3）
1981	非常勤講師	メディア論（1）活字メディア			新聞学特殊演習（3）
1982		以降、記載なし			以降、記載なし

七七年度・一九七八年度まで自主ゼミとして継続された。これを影山は、『総合ジャーナリズム研究』一九七九年冬季号（一月）から夏季号（七月）まで全三回連載された「マスコミ教授法試論」において報告した。また、調査の中間報告を、一九七六年一〇月二三日に立教大学で開かれた日本新聞学会（現・日本メディア学会）一九七六年度秋季研究発表会においておこなっている。

それでは、立教大学在職時の影山は、どのような教師だったのだろうか。「マスコミ教授法試論1——新聞読者の意見調査を中心に」において、「現在、助手。博士課程」と紹介されている奥野昌宏氏（一九四六年生まれ）に、二〇一九年八月二一日にお話をうかがった。

奥野氏と影山との出会いは、大学院の授業を通じてのものであったという。影山を当時どのようにご覧になられていたのかや印象に残っていることについての質問に、奥野氏はこう答えてくれた。

影山先生は一口で言うと、非常に誠実な人であるのと、それから開かれた人なんです。まじめで誠実で、かつ開かれた、権威主義的なところがまったくない人なんです。私が承知してる限りでは。そういうものに

対して非常に距離を置く感じの人でした。そういうこともあったんでしょうし、戦時中の経験等々もあったかもしれないんですが、アジアの留学生とか、アジアの人たちに対して非常にオープンマインドな感じだったんです。アジアの留学生なんか、結構ブライベートに面倒見てたりしたんです。八ヶ岳の山麓に、私は行ったことないんですが、よく話に出てきたんですが、八ヶ岳に山小屋と言っていました。が別荘をお持ちで、それで、よく留学生を連れて自分の車で行って過したり、そこでディスカッションしたりしたんだと思うんですが。してみたみたいです。

影山の誠実さについて奥野氏は、学生・留学生・若い研究者に対し、言うことを非常に真剣に聞くとともに同じ目の高さで話をする姿勢だったと話してくれた。ここには、「ひととき」を提案した考え方と通じるものを見出すことができます。

さらにここで注目したいのは、アジアからの留学生を大切にしていたことである。影山とアジアの留学生との交流は、東京帝国大学在学時にさかのぼることができる。

三 東京帝国大学在学時の影山三郎——曹禺『雷雨』の翻訳

影山は上記「マスコミ教授法試論¹」のなかで、「新劇は、私自身、高校時代から、ほとんど欠かさずのファンでもある」と述べている¹²。影山は東京帝国大学在学中に中国の戯曲『雷雨』を中国人留学生と共訳し、出版した。この経緯を、影山自身が綴った全四回の連載『雷雨』翻訳のころ」（『悲劇喜劇』一九八一年八月号〜十一月号）に依拠し、たどりたい。

一九三五年四月二七日から三日間、一橋講堂で午後六時から一時まで中華話劇同好会の第一回公演がおこなわれた。演目は、曹禺（一九一〇〜一九九六）『雷雨』¹³である。日本に留学中の男女の中国人留学生が演じた。影山は二七日に招待券を入手し、同日観劇している。

終演後『雷雨』に興奮していた影山は、「文章に表現してしまわなければ眠れそうもない」気持ちで、朝までかけて四〇〇字詰原稿用紙三枚にまとめた。これを影山は『帝国大学新聞』に投稿した。影山の「中華演劇を理解せよ」は、同紙五月六日号「季節の旗」欄に掲載された。

このなかで影山はこう述べている。「去月末三日間に亘つ

て、中華留日学生に依つて公演された曹禺作『雷雨』四幕はその主たる目的が存京留学生に対する慰安親睦にあつたにせよ、吾々に取つて支那演劇に對する既成概念を根底から覆すものとして非常に有益なものであつた」。そして『雷雨』を紹介したのち、次のようにいう。

由来、支那現代文化の受容ほど立遅れて居るものはない。ジョイスが問題にされ、ジイドが喧しく取上げられて居ながら支那の文学は極く少数の批評家の関心をも喚び起して居ない。魯迅、周作人等にしたところで、その作品の紹介は全く九牛の一毛にも及んで居ない状態である。恐らく吾々がヨーロッパの作品を咀嚼し、嚥下し、消化し得るよりも遙に容易であらう彼等の作品を吾々は不幸にして瞥見することさへ出来ない。

この不自然さの原因も多々あらうが我国の支那文学者達のクラシック偏重が重要な一因をなして居ることは否めない。それが為、大多数の人々の支那文学に對する概念は古典の尺度に依つて歪曲され翻訳輸入の勞を惜まぬ理解者に欠乏して居る有様である。

上演脚本の払底に頭を悩ましてゐる我国の大小新劇団は遠く欧米の脚本選択に徒らな努力を払ふより一層

隣邦の最近に於ける成果に眼を向け是が翻訳上演を企画すべきである¹⁴。

この記事がきっかけとなり、影山は中華話劇同好会のリーダーであり『雷雨』で主役「周萍」を演じた邢振鐸と出会う。邢は、東京商科大学の留学生であった。影山は五月五日前後から、邢と『雷雨』の翻訳に着手した。そして六月下旬に、二〇〇字詰原稿用紙九八〇枚以上にわたる訳稿を完成させた。

いっぽう、中華話劇同好会は同年一〇月一二日・一三日に第二回公演を一橋講堂でおこなった。洪深『五奎橋』と李健吾『這不過是春天』である。影山は演出に参加した。それとともに、筋書や解説を書いて日本人向けのプログラムを用意する役割になった。影山は留学生たちと一緒に、初日を緊張して迎えた。

初日に、観客として来場していた秋田雨雀と影山は面識を得る。『雷雨』訳稿を読んだ秋田に三上於菟吉を紹介され、共訳の『雷雨』は、三上・長谷川時雨夫妻のサイレン社で出版されることになった。

続いて秋田は『五奎橋』の翻訳を求め、影山は邢と『五奎橋』を訳した。これは、秋田雨雀編集『テアトロ』一九

三六年一月号の巻頭に掲載された¹⁵。

『雷雨』は一九三六年二月にサイレン社から刊行された。巻頭の曹の近影に続き、秋田・郭沫若・曹が序文を寄せている。

一九五一年春先ごろ原書を購入した影山は、「訳し直さなければと思った」。邢と連絡をとることができず、影山は同年夏から仕事の余暇に『雷雨』の翻訳を少しずつ進めた。これは、一九五三年四月、未来社から刊行された。

「訳者あとがき」の末尾で影山はこう述べている。「あらためて日本語に移すに当つては、中国で舞台とスクリーンの『雷雨』にたびたび接している在京の演劇研究家、劉佩丹氏^{リュウペイタン}の協力をえた。さらに東京大学文学部中国文学教室の倉石武四郎教授をわずらわし、訳稿の閲読をお願いした。また日本中国友好協会の島田政雄、久松公両氏ならびに松枝茂夫、岡崎俊夫両氏はじめ中国文学専攻のかたがたに、いろいろと非才を補つていただいた。そうでなければ、ただ芝居好きというだけで出来ることではない。ここに、お世話になったかたがたのお名前を挙げて、厚くお礼申上げる次第である」。

これに続き、次のように綴っている。

私たちのすぐ隣りにいる中国の人々は、日常の家庭生活で、どんなことを語り合い、どんなことを考えているのだろうか。その喜び、その悩みなど、中国の男性と女性、老人と青年の心理の一端を知ること、私たちの生活に、これからいつそう必要なものと考え、私はこの劇の紹介を思いたった。民衆の心をとらえ、その糧となつてゐる芸術を知ることによつて、その国の人々の心に、
 わずかでも近づけるような喜びを、私は感じる¹⁶。

「中華演劇を理解せよ」の文末において影山は「隣邦の最近に於ける成果に眼を向け」ることを主張していた(図)。「隣邦」という「私たちの



図：1956年8月に来日した曹禺(左)と影山三郎(出典：『悲劇喜劇』1981年10月号)

すぐ隣り」の存在を知ること、あるいは「ちまたのこえ」に耳を傾ける発想は、「ひととき」発案について述べた次の文章と重なる考え方である。

「封建的社會の欠陥を衝こうとする女性大衆の意見がもつてゐる力は認められなければならない」

人口の過半数を占める女性。選挙権をようやく獲得し、国政を左右する力をもった女性層。その女性たちが、こころのなかで、なにを、どのように考えているのか、ほとんどすべての「われわれ」は知らない。わずかの女性評論家を通じ、間接的にしか知ることができない。農山漁村、都市、津々浦浦の女性たちと新聞の中に、つぎつぎと誘い込み、日常の暮らしのなかで考えていることを、ありのままに書いてもらおう…女性自身が自身の目で見、こころで感じ、そして考えたことを、ひとりひとり、自分自身のペンで表現する……これこそニュースだ。

単に家庭欄だけのニュースではない。「新聞」全体として、きわめて貴重な、珠玉のニュース価値がある。あるはずだ。女性発言の場を新聞の紙面に用意しよう。「ひととき」欄の発想は、このとき、ひとつの理念に裏

打ちされた明確なイメージとして結晶した。意欲が、ある確信を伴って、わきおこってきた¹⁷。

『雷雨』翻訳にいたった発想と「ひととき」を発案した考え方に、共通性を見出すことができる。

四 立教大学在職時の影山三郎(二)——アジアの留学生とのかかわりと『朝日アジアレビュー』

前節では東京帝国大学在学時の影山の留学生とのかかわりを見た。本節ではまず、立教大学在職時のそれを紹介したい。これを考えるとき重要な人物に、卓南生氏(一九四二年生まれ)がいる。卓氏は一九六六年に来日し、早稲田大学政治経済学部新聞学科を卒業ののち、立教大学大学院社会学研究科博士課程を修了している。

卓氏は一八九九年に大学教員(東京大学新聞研究所助教授)になって以来の日本に坎する論文等をまとめた『日本アジア報道とアジア論』(日本評論社)を、二〇〇三年に上梓した。同書の中表紙の裏には、こう書かれている。「来日して以来、陰ひあなたになって私を励まし、支えて下さった故影山三郎先生と、文夫人に感謝し、本書を捧げたいと思う」。

巻頭の「はじめに 日本との出会い」は、一一頁に渡っている。酒井寅吉・小山栄三・殿木圭一・千葉雄次郎・米山桂三(記述の順)といった、メディア研究者との直接・あるいは著作物とおしての出会いが綴られている。そして最後に「影山三郎先生との出会い」との小見出しのもと、影山に言及されている。

7年余の日本留学の間、「アジア」「アジア報道」などの問題で最も率直に議論ができ、浅からぬ影響を受けたのは、立教大学の影山三郎教授であった。影山先生はジャーナリスト出身で、『朝日ジャーナル』編集長、『朝日新聞』論説委員などを務めた。当時はまだ立教大学の非常勤講師(のちに教授となった)であったが、真剣な授業と学生に対する思いやりは、専任の教授たちには及ばないものがあつた。影山先生は学生の論文を事細かに添削し、学生をしばしば自宅に招いて夜遅くまで語り、私だけでなく他大学の留学生たちもよく面倒をみていた。ある時、アジア人留学生の下宿探しが難しいと聞いた先生は、自宅の庭に留学生用の宿舎を建てることを夫人と真剣に考えられたが、私たち留学生が思いとどまらせたこともあつた。それで留

学生たちは、影山先生を現代の「藤野先生」と称えたものであった。

影山が「学生をしばしば自宅に招いて」いたことは、奥野氏ら、立教大学在職時の影山を直接知るかたがたからもうかがっている。また上記の文章は、アジアからの留学生を大切にしていた旨の奥野氏の語りの裏づけともなろう。影山の自宅を訪問したときのことを、卓氏はこう回想している。

「戦争」と「アジア」にかかわった世代の日本人とこうした問題を率直に語る際、時として緊張と感情の高ぶりを招くことがある。影山先生の自宅で、戦前の日本の暗い時代が話題になったとき、ある学生が「先生はなぜ反抗しなかったか」と質問した。これに対して影山先生は、当時の軍国主義の状況を説明する一方、自殺したいほど悔やんでいると声を高めて真情を吐露されたことがある。先生の激高した姿に私たちは感動したが、心配した夫人は、こうした話題はもうやめてほしい、と何度かこっそり学生たちに懇願されたことがあった。

さらに、卓氏はこう述べている。日本とアジアの関係性についての影山の考えの一端を見ることができよう。

影山先生は、日本人が戦争を阻止できなかったことをずっと悔やみ、戦後の「逆コース」を苦々しく思っていたと、先生が亡くなったのち夫人から聞かされた。先生の晩年の口癖は、「日本がアジアと真の友好関係を築くには、もう一回敗戦する必要があるだろう」ということだった。影山先生は、平和を愛する率直な日本人の心を代表していたように思う。

第一節で見たように影山は一九六六年一〇月に朝日新聞社を定年退職し、一九七二年一〇月まで出版局嘱託勤務をしていた。この期間の多くは、立教大学在職時と重なっている。朝日新聞社は一九七〇年三月一日に、季刊の『朝日アジアレビュー』を創刊した（一九七八年二月休刊）。同誌は、一九七〇年代の日本外交の緊急課題は日中関係の正常化であるという趣旨のもと創刊されたものである¹⁸。卓氏によると、影山は同誌の副編集長を打診されたという。

1970年代初め、『朝日新聞』は日中復交の動きに

歩調を合わせて、『朝日アジアレビュー』の創刊を準備し、影山先生に副編集長を依頼したが、当初、先生はこれを躊躇し、先輩たちに相談したのち、やっとこの仕事を引き受けることになった。影山先生の世代の良心的な学者やジャーナリストにとって、「アジア」は確かに扱いにくいテーマであった¹⁹。

この『朝日アジアレビュー』の一九七〇年冬季号（第四号）では、「アジア留学生と日本」という特集がされている。同特集は四本の記事で構成されている。三本目に、田中宏氏（一九三七年生まれ）「アジア留日学生年史」が七頁にわたり掲載されている。これは、一八九五年五月の「慶応義塾に朝鮮留学生、集団で入塾（一一四人）」に始まる「留学生年史」と「関連事項」の二段で構成された年表である²⁰。田中氏は、当時財団法人アジア学生文化協会に勤務していた²¹。

田中氏に二〇二〇年二月二日にお話をうかがった。同氏は、単独で影山の自宅を訪問したことはなく、先に影山と面識を得ていた卓氏や、複数の留学生と行っていたという。影山とのあいだで戦前の留学生の事件などがよく話題になっており、二段組の年表を作成するアイデアを影山から

提供され、先の「アジア留日学生年史」を作成した。

田中氏は一九七三年夏季号（第一四号）には、アジアで発表された二本の文章の翻訳を寄せている（田中氏は一九七二年五月に愛知県立大学の教員になっている）。一本は、シンガポールの『星洲日報』一九七二年一月二二日付に掲載された遙雲「日本と東南アジアの関係——日本の「アジア通」の東南アジア論を評す——」である。もう一本は、方修「馬華新文学とその発展過程」である。これ以降も六本の原稿と一本の翻訳を寄せている。

筆者が田中氏に、影山に会ったときに印象に残っていることについて尋ねると、田中氏は次のように答えてくれた。

東大の中国の留学生と交流してたころの様子を想い出して話をしてくれたことってのは、すごく印象に残ってますね。

このことについて、田中氏はインタビュのなかで次のようにも語ってくれた。

昔の東大の学生時代のときのあれと、今日の前にいる卓君とのあれってのは、かぶりながらね、結構芝居

の話をしてくれたような気がするんだよね。そのとき非常に思い深くというのかな、それは話しながら目の前にいる卓君と重ねてんじゃないかなっていう、そういう感じはすごく持ちましたね。

『雷雨』に、なんか関わって、手伝ったのか、一緒にやったのかまったくよく知らないけども。それは聞いたことあって。だから私の理解では、たぶん東大の学生のときの中国留学生との出会いというのか、それがたぶんベースにあるんだろうと。卓君とつながるのはね。だから、そういうことで影山さんのほうがやっぱり留学生については、特別な思いというのが、学生時代の延長線上であつたんじゃないかなというのがひとつありますね。だからそれが卓君を結び付け、そして私はアジア文化会館の留学生の会館にいたので、その関係でそれにうまくくっついて行く日本人みたいな感じで付き合ったという、そんな感じですよ。

ここに、影山が東京帝国大学在学時に留学生と交流を持ったことと、立教大学在職時に留学生を大切にしたこととの連続性を見出すことができよう。

五 影山二郎とアジア

以上の議論から、次の二点を確認しておきたい。

第一に、影山は、『雷雨』を共訳するなど、東京帝国大学在学中に中国の留学生たちとかかわりを持った。これが、立教大学在職時の留学生を大切にした姿勢と連続している。第二に、影山は東京帝国大学在学時に、「隣邦」に「眼を向け」ることを主張した。朝日新聞社入社後には「『ちまたのこえ』にきく」という発想が、「ひととき」のひとつのルートとなった。そして「ひととき」によって、「人口の過半数を占める」「女性たちが、こころのなかで、なにを、どのように考えているのか」を「ありのままに書いてもらう」とした。立教大学在職時には、田中氏に年表を作成してもらうなど、『朝日アジアレビュー』という、広くアジアを見つめる媒体にかかわった。

この第二の点については、同時代的には『雷雨』という翻訳書・「ひととき」という投稿欄・『朝日アジアレビュー』という雑誌という各メディアをとおして、「ちまたのこえ」をとらえようとしたと考えられる。また、歴史的には『新聞投書論』という書籍をとおして「ちまたのこえ」をとらえようとしたのである。

本稿では、朝日新聞社就職以前の東京帝国大学時代のアジアとのかかわりと、立教大学在職時のアジアとのかかわりとのつながりという、メディア史におけるこれまでの影山像では欠落していたものを補った。なお第一節で紹介した、立教大学在職時の読者調査については、他日を期したい。

ところで吉見俊哉は、「一九八九年から二〇一九年までの『平成』の三〇年間は、一言でいえば「失敗の時代」だった」とし、「平成」という失敗についての一種の博物館を、一冊の本のなかに実現すること」を「試み」た²²『平成時代』（岩波書店、二〇一九年）の結論部分でこう述べている。「アジアとの関係を根本的に再構築しよう」としない日本にも未来はない²³。

この指摘にかんがみると、影山三郎を単なる過去のジャーナリストと見なすのではなく、「影山三郎とアジア」という視座から再評価をし、学びをえることができるのではないだろうか。

【注】

1 「ひととき」生みの親 影山三郎氏「朝日新聞」一九九二年七月一日朝刊三一面。

2 『曙光新聞』については、影山三郎編『レイテ島捕虜新聞——絶

望から文化創造へ』立風書房、一九七五年、影山三郎編（香内三郎解説）『レイテ島曙光新聞物語 増補版（レイテ島捕虜新聞）』彩光社、一九八〇年、影山三郎編（縮刷版）『レイテ島の曙光新聞——手作りの新聞にみる捕虜生活』彩光社、一九八〇年が刊行されている。

3 以上、阪本博志「解題『朝日新聞家庭面「ひととき」』欄の三十年——戦後マスコミ読者論」影山三郎（阪本博志編・解題）『朝日新聞家庭面「ひととき」欄の三十年——戦後マスコミ読者論』別巻、金沢文圃閣、二〇一九年、一八二頁。

4 「追悼『朝日人』一九九二年八・九月合併号、一六七頁。

5 以上の経緯については、影山三郎「投書欄の拡大と開発」『新聞研究』一九六五年二月号、二五頁。

6 影山三郎『新聞投書論——民衆言論の一〇〇年』現代ジャーナリズム出版会、一九六八年、三二二頁。影山三郎『読者の言論——歴史と展望（増補版・新聞投書論）』現代ジャーナリズム出版会、一九七六年、三五五頁。

7 阪本、前掲「解題」、一六八頁。

8 「人事」『立教大学学報』第二二五号、一九六八年二月二〇日、三頁。

9 影山三郎「マスコミ教授法試論Ⅰ——新聞読者の意見調査を中心に」『総合ジャーナリズム研究』一九七九年冬季号、一〇九頁、一〇頁。

10 立教大学社会学部二十五周年記念誌委員会編『立教大学社会学部二十五周年記念誌』立教大学社会学部二十五周年記念事業委員会、一

九八三年、一〇五頁、一〇六頁においても教授在職期間を確認した。

11 影山が八ヶ岳に「木造の小さな家を建て」ていたことは、影山三郎「八ヶ岳への道」「立教」第八〇号、一九七七年にて確認できる。

12 影山、前掲「マスコミ教授法試論1」、一二二頁。

13 佐治俊彦による『集英社 世界文学大事典』の「曹禺」の解説では、次のように述べられている。「1928年南開大学政治科に入学、翌年清華大学西洋文学科に転じ、シェイクスピア、チェーホフ、ギリシャ悲劇などを学び、特にユージン・オニールに傾倒した。33年大学卒業、在学中に執筆した戯曲『雷雨』（解説後出）が巴金^{はきん}の推薦で34年に発表され、35年東京における留日学生の上演が好評を博してより、その後30年間でもっとも多く演じられた劇となり、中国新劇に新時代を画することとなった。『雷雨』の解説はこう結ばれている。「中国に真の近代劇をもたらした記念碑的作品といえよう」（佐治俊彦「曹禺」『世界文学大事典』編集委員会編『集英社 世界文学大事典』第二巻、集英社、一九九七年、七五七頁）。

『岩波 世界人名大辞典』の「曹禺」の項では、曹禺の『雷雨』『日出』（一九三六年）『原野』（一九三七年）『北京人』（一九四一年）などが、「現在もなお繰り返し上演され、20世紀の中国演劇を代表する作品となっている」（岩波書店辞典編集部編『岩波 世界人名大辞典』第一分冊、岩波書店、二〇一三年、一四九七頁）と末尾で言及されている。

14 影山三郎「季節の旗 中華演劇を理解せよ」『帝国大学新聞』一九三五年五月六日号八面。旧制高校・帝国大学における「教養主義

の精髓は西欧文化志向である」（竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社、二〇一三年、一七〇頁）。このことにかんがみても影山の主張が独特のものであったことが理解できよう。

15 この号の「編集後記」には、次のように書かれている。「それにしてこの号は、内容的には「テアトロ」の健在を示し得るものである。中国の代表的な農民劇「五奎橋」を読んで下さい。立派な作品ではないか。先に中華同学新劇で上演して大成功を収めたもの。翻訳も苦心のかひあつて立派なものだと思ふ」（「編集後記」「テアトロ」一九三六年一月号、一〇二頁）。ここからも、秋田からの評価の高さを窺うことができる。

16 影山三郎「訳者あとがき」曹禺（影山三郎訳）『雷雨』未來社、一九五三年、三一七頁―三一八頁。

17 影山三郎「メディアを変えるのはあなた」『望星』一九八〇年七月号、二六頁―二七頁。

18 朝日新聞出版局『朝日新聞出版局五十年史』朝日新聞出版局、一九八九年、四一四頁、六六八頁。

19 以上、卓南生「日本のアジア報道とアジア論」日本評論社、二〇〇三年、九頁―一〇頁。

20 一九七三年に日本放送出版協会から、永井道雄・原芳男・田中宏『アジア留学生と日本』が刊行されている。この第一章の永井「留学とは何か」は、「アジア留学生と日本」特集の四本目の記事である永井「反抗する留学生たち」ならびに『東京新聞』夕刊に一九六

記して感謝したい。
なお本研究は、JSPS科研費15K03855・18K02001の助成を受けたものである。

(帝京大学文学部教授)

二年九月九日から一日まで永井が連載した「アジア人の日本留学」に補筆したものである。また、第三章の原「留学についてのアジアの現状」も、『朝日アジアレビュー』一九七一年夏季号「日本留学生の現地追跡レポート——東南アジアをまわって」が一部使用されている。同書巻末の田中「アジア留日学生史年表」も、「アジア留日学生年史」に追加訂正したものである。

21 田中氏の経歴については、「田中宏名誉教授略歴」『一橋論叢』二〇〇一年二月号（第一二五巻第二号）も参照した。

22 吉見俊哉『平成時代』岩波書店、二〇一九年、六頁。

23 吉見、前掲書、二四八頁。

付記・立教大学時代の影山三郎についてのインタビュー調査においては、（お話をうかがった順に）奥野昌宏氏・卓南生氏・竹之内裕一氏・八田正信氏・森聰氏・田中宏氏・金容権氏・三浦正人氏にご協力をいただいた。

影山については、有馬真喜子氏にもお話をお聞かせいただいた。また、「ひととき」欄に一九五四年四月掲載された投書をきっかけに同年七月に結成されたサークル「希交会」の主要なメンバーであった方々にも、影山にお会いになられたときのことをうかがった。

文献調査においては、井川充雄氏・宮川英一氏（立教大学立教学院史資料センター）にご協力をいただいた。

影山についての調査の過程では、畑山美和子氏・前田浩次氏にもご協力をいただいている。